

安西王マンガラ鼠年(1276)令旨のパスパ文字

吉池孝一

1. はじめに

パスパ文字が至元六年(1269)に公布されて以降、年代の確定できる資料はクビライの至元十二年(1275)のパスパ文字漢語聖旨碑「龍門神禹廟聖旨碑」が最初である。それに次いで至元十三年(1276)の本碑「安西王マンガラ鼠年(1276)令旨」がある。これはパスパ文字モンゴル語と漢語訳が合璧となったもので、照那斯図 1991(注1)によると原石は陝西省韓城県に、原拓是北京図書館にあるという。利用しやすい拓本として北京図書館金石組 1990(注2)があるけれどもパスパ文字モンゴル語の碑首と碑身の一部が欠けている。これは Chavannes1908(注3)あるいは Poppe1957(注4)で補うことができる。以下、この碑文のパスパ文字につき気の付いた点が幾つかあるので紹介する。

パスパ文字のローマ字翻字は次のようにする(注5)。

〈子音〉は、 $\bar{\alpha}g$ $\bar{a}k'$ $\bar{a}k$ $\bar{c}n$ \bar{d} $\bar{z}t'$ $\bar{r}t$ $\bar{a}n$ $\bar{r}l$ $\bar{v}b$ $\bar{v}p'$ $\bar{v}p$ $\bar{v}m$ $\bar{z}f$ ($\bar{z}f_1$ 奉母、 $\bar{z}f_2$ 非母・敷母。f1 と f2 の区別がない場合は f とする。なお数字の 1 は濁音に 2 は清音に対応する。以下同様) \bar{v} \bar{e} \bar{j} $\bar{c}c'$ $\bar{c}c$ $\bar{r}n$ \bar{s} ($\bar{s}1$ 禪母、 $\bar{s}2$ 審母) \bar{z} \bar{z} \bar{c}' \bar{c} \bar{s} \bar{z} \bar{r} \bar{h} ($\bar{h}1$ 匣母、 $\bar{h}2$ 曉母) $\bar{\gamma}$ \bar{y} ($\bar{y}1$ 喻母、 $\bar{y}2$ 幺(影)母) \bar{r}' \bar{r} \bar{q} とする。

〈半母音〉は、 \bar{u} \bar{i} とする。

〈母音〉は、 \bar{u} (音節中は \bar{u} 。以下同様) \bar{a} (\bar{a}) \bar{i} \bar{v} / \bar{v} / \bar{v} / \bar{v} (\bar{v} / \bar{v} / \bar{v}) \bar{e} \bar{e} \bar{s} / \bar{s} (\bar{s} / \bar{s}) \bar{o} とし、母音の a を補写する。

なお、音節間の余白はハイフン「-」で、多めの余白は「-----」で、欠落等により文字が見えない場合は[]で示す。

2. ローマ字翻字及び補訂

■パスパ文字モンゴル語部分

碑額

1. [q·a]
2. nu
3. [su]
4. dur

碑身

1. moŋ-[k' a]-dénŋ-r[i]-yin- k' u- č' un-dur-----

2. q·a-nu-su-du[r]-----
3. -----γoŋ-jhi- · an-[s]i-'ũaŋ- · eu-ge-ma-nu-č' é-ri- · u-dun-no-yad-da-č' é-rig-ha-ra-na-ba-la-qa-du[n]-
4. ----- --šil-d·[e]-dun-da-ru-qas-da-no-yad-da-yor-č' i-qun-ya-bu-qun-él-č' i-ne-d·ul-qa-qué-
5. -----bi-č' i[g]-----
6. ----- j̄iŋ-[gis]-qa-nu-ba-q·a-nu-ba- j̄ar-liq-dur-do-yid-ér- k' e- ·ud-sén- šhi-ŋud-daš-mad-
7. ----- c' a[ŋ-t' am]-qa-da-č' a-bu-ši-'a-li-ba-'al-ba-qub-č' i-ri-'eu-lu-'eu- j̄en-----
8. -----[dēŋ]-ri-yi- j̄al-ba-ri- j̄u-hi-ru- ·er-'eo-gun-'a-t' u-qayi-g·ek' -deg-sed-'a- j̄u----
9. ----- ·uê-ê-du- ·e-b[e]r-b[eo]- ·e-su-u-r[i]-da-nu-----
10. ----- j̄ar-li-qun-yo-su- ·ar-c' aŋ-t' am-qa-da-č' a-bu-ši-'a-li-ba-'al-ba-qub-č' i-ri-'eu-lu-'eu-
11. ----- j̄en-dēŋ-ri-yi- j̄al-ba-ri- j̄u-hi-ru- ·er-'eo-gun-'a-t' u-qayi-g·en-piŋ-yaŋ-fu-
12. -----da-b[u]-gun-yêv-[mêv]- γiv-t' u-mêv-yeu-'ũaŋ-mêv-dur-'a-qun-gĩaŋ- j̄in-ži-nu-
13. -----o-ra-na-duŋ- j̄in-ži-ni-sén-šhi-ŋu-di-'eo-t' eo-gu-le- j̄u-hi-ru- ·er-'eo----
14. -----gun-'a-t' u-qayi-g·en-ba-ri- j̄u-ya-bu- ·ayi-----
15. -----bi-č' ig-'eog-beê-ê-de-nu-güen-dur-gê-yid-dur-'a-nu-él-č' in-bu-ba- ·u-t' u-
16. -----qayi-u-[l]·a-ši- ·u-su-bu-ba-ri-t' u-qayi-qa- j̄ar-u-su-ya- ·u-k' e-'a-nu-bu-li- j̄u-
17. -----t' a-t' a- j̄u-bu-'ab-t' u-qayi-ê-de-ba-sa-s[ê]n-šhi-ŋud-----
18. -----bi-č' ig-t' en-g·e- j̄u-yo-su-'eu-ge- ·uê-'euê-les-bu-'euê-led-t' u-
19. -----geê-'euê-le-du- ·e-su-[']eu-lu- ·u-'a-yu-qun-mud-----
20. -----bi-č' ig-ma-nu-qu-lu-qa-[na- j̄]il-qa-bu-run-t' é-ri-----
21. ----- ·un-za-ra-yin-qo-rin- j̄ir-----
22. -----qo- ·a-na-giŋ-č'êv-fu-da-----
23. -----bu-guê-dur-bi-č' i-beê-----

碑額にパスパ文字がある。北京図書館金石組 1990 の拓本では欠けているけれども、Chavannes1908 と Poppe1957 と 照那斯図 1991 で確認することができる。いずれもこの部分のパスパ文字について言及しない。碑首の左右に花卉様の文様があり、その間に四行に渡って双鉤字（縁取りをした文字）が刻されている。一行目と三行目は文字の一部しか見えないけれども「[q·a]（可汗）／nu（の）／[su]（福蔭）／dur（において）」と読むことができる。

碑身の文字につき幾つか触れなければならない点がある。本碑をローマ字化したものとして、Poppe1957、照那斯図 1991、呼格吉勒図・薩如拉 2004（注 6）が参考となる。これらは Chavannes1908 の拓本により、10 行目-'a-li-ba-の ba を見えないとし[ba]などと表記するけれども、北京図書館金石組 1990 の拓本には ba は明瞭に写っている。これより-'a-li-ba-とする。さらに、Poppe1957、照那斯図 1991 は 12 行目-b[u]-gun-の b も見えないとするけれども、北京図書館金石組 1990 の拓本には b は明瞭に写っている。これよ

り-b[u]-gun-とする。なお本碑の研究書に亦隣真 1963 (注 7) がある。拓影は何に拠ったものか明示しないけれども Chavannes1908 を使用したはずであるから、-'a-li-ba-と-b[u]-gun-とするうち、前者は-'a-li-[ba]-の誤植に相違ない。

■漢語訳部分

Chavannes1908 および北京図書館金石組 1990 により、照那斯図 1991 と呼格吉勒図・薩如拉 2004 を訂正する。なお、[]で欠落を。□で文字が無いことを示す。亦隣真 1963 に「如今依着在先前聖旨躰例」、照那斯図 1991 に「如今照依先前聖旨躰例」、呼格吉勒図・薩如拉 2004 に「如今依照着在先聖旨躰例」とある。入矢義高 1956 (注 8) は「如今照依[] [] [先]前聖旨躰例」とする。拓本によると欠落の三字目の一部が残っており「如今照依[] [] [先]前聖旨躰例」と読むことができる。ひび割れによる欠落は二字もしくは三字分であるから、「依」と「[先]」の間に一字もしくは二字入る可能性を指摘すべきである。照那斯図 1991 と呼格吉勒図・薩如拉 2004 に「地稅商稅不揀甚麼休着者」とあるが、拓本により「甚麼」と「休着者」の間に「差發」を補い「地稅商稅不揀甚麼差發休着者」とすべきである。亦隣真 1963 はそのようにしている。照那斯図 1991 と呼格吉勒図・薩如拉 2004 に「這平陽府裏有的」とあるが、拓本によると「這平陽□□府□有的」とある。「陽」の後二字分、「府」の後一字分の空白があるけれども文字は確認できない。これより「這平陽府有的」とすべきである。亦隣真 1963 はそのようにしている。照那斯図 1991 と呼格吉勒図・薩如拉 2004 に「令旨與了也」とあるが拓本によると「令旨[]也」とある。ひび割れによる欠落は一字分であるから「令旨[與]也」とすべきである。亦隣真 1963 はそのようにしている。なお、松川節 2005 (注 9) によると祖生利 2000 (注 10) があるというが残念ながら未見である。

3. 字形

・éの字形は𠄎 (音節中は<1) とする。12 行目のγiv-t' u-mév は、𠄎のように中央の横線が平らになっているように見えるけれども、他はすべて右から左に下る斜線である。あるいは 12 行目は採拓の具合によるものかもしれない。なお、爪のある𠄎 (<1) などは確認できない。

・šはモンゴル語五例中𠄎とするもの三例 (4 行目 šil-d·[e]-dun, 10 行目 bu-ši, 16 行目 ši·u-su)、𠄎とするもの二例 (6 行目 daš-mad, 7 行目 bu-ši)。漢語は三例全て𠄎とする (6, 17 行目 sèn-šhi-ᠩud、13 行目 sèn-šhi-ᠩu)。漢語三例は「先生」の「生」を音写したものである。精密なパスパ文字表記では、漢語の禪母字を𠄎 š1 とし審母字を𠄎 š2 とし、両者区別する。「生」は審母字であるから意図して𠄎 š2 があてられているように見えるけれども、区別の不要なモンゴル語の表記にも𠄎と𠄎が見えるため、区別をした結果𠄎となっているものかどうか、にわかには判断しかねる。そこでローマ字翻字ではすべてšとした。

・nの字形は概ね𠄎である。6 行目 jīᠩ-[gis]-qa-nu が𠄎のように見える。後者は一例の

みであり採拓の具合によるものかもしれず、ここでは詳説しない。

・n の規範的な字形は𐰽であり、曲線部分は閉じている。7 行目'eū-ḡen は𐰽のように僅かに開いている。後者は一例のみであり、これも採拓の具合により墨が入り開いているように見えるだけかもしれず、ここでは詳説しない。

4. パスパ文字漢語

漢語をパスパ文字で音写したパスパ文字漢語と対応する漢字漢語を列挙すると以下のとおりである。

皇子=γoŋ-jhi (3 行)、安西王=・an- [s]i-üaŋ (3 行)、先生=sén-šhi-ŋud (6, 17 行)、先生=sén-šhi-ŋu- (13 行)、平陽府=piŋ-yaŋ-fu (11 行)、[堯]廟=yév-[mév] (12 行)、后土廟=γiv-t' u-mév (12 行)、禹王廟=yeu-' üaŋ- mév (12 行)、姜真人=gǎaŋ-jin-ži-nu (12 行)、董真人= duŋ-jin- ži-ni (13 行)、觀=güen (15 行)、京兆府=giŋ-čév-fu (22 行)。なお、7 行目と 10 行目の c' aŋ-t' am-qa の c' aŋについては述べない。

以上、漢字 22 種、重複を数えた延べ数 32 の内、『蒙古字韻』と一致しないものは 4 種延べ数 6 となる。以下、4 種につき検討する。なお、先に述べたように『蒙古字韻』では禪母字𐰽 š1 と審母字𐰽 š2 を区別するため、厳密には本碑と異なるけれども、この点についてはšで翻字し言及しない。

・「先生」の「先」は三例とも sén であるが、『蒙古字韻』は sen (下 10b-7) とする。ここで中古の刪韻、仙(獮)韻、先韻所属字の韻図における等位(一~四等欄)と e,èとの対応をみると次ぎのとおりである。『蒙古字韻』では、姦 gen (刪韻二等)、蹇 gèn (獮韻三等・重紐 b 類)、遣 k'en (獮韻四等・重紐 a 類)、牽 k'en (先韻四等)のように、k, k-g などの所謂牙音にあつては e と è は韻図の等位によりほぼ整然と使い分けられる。しかしながら、それ以外の声母の下ではその種類により補い合う分布をなす。舌尖破擦音の例を見ると、箋 jen (平声・先韻・精母)、千 c'en (平声・先韻・清母)、前 cén (平声・先韻・從母)、先 sen (平声・先韻・心母)、涎 zén (平声・仙韻・邪母)とある。e と è の使い分けの条件を無理なく設定することは困難である。「前」と「涎」は中古音で有声音の声母をもつから、あるいは、Dragunov1932 (注 11) が自ら否定しつつも紹介した論と関わりがあるのかもしれない。すなわち、声母が有聲か無聲かということに伴って発生する音調の高低と関係するといふのである。有聲音(低調)の後でèとなり、無聲音(高調)の後で e となるというものであるが、例外も多いといふ。e と è の使い分けが、音声に関わるものであるのか或いは音声とは関わりのない何らかの事情によるものか今後の課題であろう。いずれにしろ、現存する『蒙古字韻』によるかぎり sén という音節そのものが存在しないということになる。もっとも『蒙古字韻』に類する書は数種類あつたことが『蒙古字韻』の「校正字様」の記述から分かるわけであり、「先」を sén とする書もあつたのかもしれない。問題は、パスパ文字が公布されたとき「其の字は僅かに千余」(元史積老伝)であつたといふが、規範として作られた「千余の字」すなわち

「千余の音節」（注 12）がどのようなものであったかということであろう。現存の『蒙古字韻』は参考とはなるけれども、最初期の規範そのものであったとは限らない。今よりも単純な構成であったものに手が加えられ現存の『蒙古字韻』ができた可能性はある。

・「禹王廟」の「禹」は *yeu* であるが、『蒙古字韻』は *'eu*（上 30b-7）とする。漢語を表記する *y* には、**Uy1** 喻母と **Uy2** 幺(影)母の二種があるけれども、碑文ではふつう両者を区別しない。「禹」は中古音の喻母三等字であるから **Uy1** が意図されていたはずである。そこで『蒙古字韻』における *y1* と *'* の分布と韻図の等韻との関係を見ると次のとおりである。

	一等	二等	三等	四等
開口		<i>y1</i>	<i>y1</i>	<i>y1</i>
合口	<i>'</i>	<i>'</i>	<i>'</i> （ <i>'eu</i> 禹など）	<i>y1</i> （ <i>y1eu</i> 與など）

両者の使用区分は明瞭である。「禹」は合口三等に相当し *'eu*（*eu* を合口韻とみなす）と表記される。なお、参考までに挙げた「與」は合口四等で *y1eu* と表記される。「禹」と「與」は『蒙古字韻』では異なる音であるが、『中原音韻』では同音となる。本碑において、これが *yeu* と表記されたのは、**U'** の字形が **Uy1** と類似していたため混同が起こったということであろうが、『中原音韻』に代表される北方の有力な漢語方言で同音となっていたということも手伝ったものと思われる。

・「姜真人」の「姜」は *giǎŋ* であるが、『蒙古字韻』は *geŋ*（上 16a-1）とする。『蒙古字韻』では *i* と *e* が区別無く *e* で記されている部分があるようで、服部四郎 1946（注 13）は *gev*（下 17a-7）と *ge*（下 29a-3）と *geŋ*（上 16a-1）に使用されている *e* を校訂し *i* とした。*i* と *e* をめぐる状況がどのようなものであるかということ、*gev*（下 15b-9）のもとに「驍」（四等）などの字が収録されており、さらに他の箇所にも *gev*（下 17a-7）のもとに「交」（二等）などの字が出てくる。同様に、*ge*（下 27a-9）のもとに「結」（四等）などの字があり、さらに他の箇所にも *ge*（下 29a-3）のもとに「家」（二等）などの字が出てくる。このような重複は、この手の書物にはふつう起こらない。また各々の後者、すなわち「交」や「家」などには、碑文において *i* と *e* の両形を見出すことができる。これより、後者の *gev* と *ge* を *giav* と *giǎ* と校訂し、主母音としては広母音の *a* を想定する。問題の *geŋ* のもとには三等の「姜」や二等の「江」などが収録されている。*geŋ* という音形はこれのみであり、*gev* や *ge* の場合のように他に対立する音形はないけれども、碑文には *i* と *e* の両形を見出すことができる。この点は「交」や「家」などと同様である。これより、『蒙古字韻』の *geŋ*（上 16a-1）を *giǎŋ* と校訂する訳である。おそらく、広母音を主母音に持つ二等字（牙喉音声母のみ）と三等字は、当初 *i* で表記されたけれども、**i** 𐰃 と **e** 𐰄 の字形が類似していたため混同が生じ、*e* で表記される場合もでてきたということであろう。なお、『中原音韻』では「交」と「驍」、「家」と「結」は異なる音である。

・「觀」は *güen* であるが、『蒙古字韻』では *gon* (下 7b-1) とするものが平声と去声の二カ所にある。さらに *küen* (下 11a-5) とするものがあり、こちらは平声字である。もっとも、*küen* (下 11a-5) のもとに「觀」とあるのは「顴」(頬骨) の誤写であり、この点は寧忌浮 1997 (注 14) により校訂がなされている。また『集韻』によっても *güen* に相当する字音をもつ「觀」を見出すことはできないから、たとえ現存『蒙古字韻』以外にパスパ文字漢語の規範的な書が有ったとしても *güen* は期待できない。碑文の「觀」は意味の上から去声の *gon* に相当するわけであるが、これがなぜ *güen* と表記されたものか説明は困難である。

5. 漢字音写モンゴル語

モンゴル語を漢字で音写した漢字モンゴル語と対応するパスパ文字モンゴル語を列挙すると以下のとおりである。

da-ru-qas (4 行) = 達魯花赤、*jiŋ-[gis]* (6 行) = 成吉思、*q'a-nu* (6 行) = 匡罕、*ér-k'e-ud* (6 行) = 也里克温、*daš-mad* (6 行) = 達失蠻。

いうまでもなく、モンゴル語は複数形で漢字音写語は単数形という対応上の相違がある。パスパ文字モンゴル語の音節と、漢字に想定される規範的なパスパ文字綴りとは直接の関係はないけれども、これらの対応は、モンゴル語と漢語の当時の音韻の状況を考察する上で資料を提供してくれる。上の対応で問題となるのは、これも指摘されて久しいことであるが、*jiŋ-[gis]* と成吉思であろう。パスパ文字の語頭子音は *ʃ* で有声音(軟音)が想定される。漢字音写に用いられた「成」は中古では有声音声母をもっていたけれども、元代北方の方言音を表わす『中原音韻』では無声帯気音に変化しており、モンゴル語の無声音(硬音)の表記にこそふさわしいものとなっていた。これを音の不一致とみなした場合、子音間の同化や異化、トルコ系言語音やその文字表記との関係など様々な事情を考慮しなければならず、今述べることのできるような考えは持ちあわせていない。ここではモンゴル語音と漢語音は一致すると見なすことも可能であることを確認するに止める。「成」は中古音の禪母字即ち有声音子音であるから、元代当時であっても有声音であった有力な方言があったはずである。さらには、現在の長沙や厦門のように無声無気音に変化していた方言もあったはずである。そのような方言の字音が反映し漢字音写語が作られ「成吉」という好ましい漢字の意味とともに固定化し使用されたという可能性はある。

注

1) 照那斯圖 1991, 『八思巴字和蒙古語文獻 II 文獻匯集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1991 年。pp. 123-127 参照。

2) 北京図書館金石組 1990, 『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編 元 049』河南省: 中州古籍出版社)。p. 14 参照。

- 3) Chavannes, Éd. 1908, *Inscriptions et pièces de chancellerie chinoises de l'époque mongole, T'oung Pau*, sér. 2, 9 (1908). pp. 376-381, Planche 19 参照。
- 4) Poppe, N. 1957, *The Mongolian Monuments in Hp'ags-pa Script*, Second Edition translated and edited by J. R. Krueger, Wiesbaden, 1957. pp. 46-47, Plate I 参照。
- 5) この翻字案は「言語文化接触に関する研究」(AA研。平成12年3月24日)で公表し、その後改訂を加えたものである。
- 6) 呼格吉勒図・薩如拉 2004, 『八思巴字蒙古語文献彙編』内蒙古教育出版社。pp. 371-379 参照。
- 7) 亦隣真 1963, 「讀1276年龍門禹王廟八思巴字令旨碑」『内蒙古大学学报』1963-1。今は『亦隣真蒙古学文集』(内蒙古人民出版社, 2001, pp. 427-446) による。
- 8) 入矢義高 1956, 「蔡美彪氏編「元代白話碑集録」を読む」『東方学報』26, 1956, pp. 186-228。p. 227 参照。
- 9) 松川 節 2005, 「13~14世紀モンゴル文碑刻リスト」『13,14世紀東アジア史料通信』4号、pp. 1-15。
- 10) 祖生利 2000, 「元代白話碑文集録校注」『元代白話碑文研究』下編、2000、北京(中国社会科学院研究生院博士学位論文)。
- 11) Dragunov, A. 1932, *The hp'ags-pa script and Ancient Mandarin, Izvestija Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Gumanitarnyx Nauk (Classe des Humanités)*, No. 9, pp. 627-647; No. 11, pp. 775-797。今は北京勤有堂書店1941年影印本による。pp. 777-778 参照。
- 12) Poppe 1957, p. 5 “Its syllables [?字] are only a little more than a thousand in number” とある。「字」を音節とみなす考えは妥当なものであろう。
- 13) 服部四郎 1946, 『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂。pp. 42-45 参照。
- 14) 寧忌浮 1997, 『古今韻会举要及相關韻書』中華書局。p. 178 参照。